市長メッセージ 190

糸川のライトアップ

熱海市長　齊藤　栄

令和3年度から行ってきた糸川遊歩道の景観整備事業が今年の3月末に完成します。今回の整備事業のポイントはライトアップによる光の演出です。

前回の糸川の整備事業は15年ほど前に行いました。さまざまな樹木が植えられていたのをあたみ桜に統一することで、あたみ桜の名所として生まれ変わったのはご存じの通りです。遊歩道沿いには明るさを抑えたライトを配置したのですが、今回時代に合わせて、いわゆるインスタ映えする照明に変えました。

具体的には、川の欄干に多数のＬＥＤライトを配置し、あたみ桜、ブーゲンビリアの開花の季節、あるいは花の無い時期に合わせ、色合いを単色、複数色、色が流れるパターンなどに変えることができます。また、開花した花を照らすライトも、欄干のＬＥＤライトと連動して色を変化させることができます。

さらに、ドラゴン橋にシンボルオブジェ「未来の輪」を設置しました。今後、スマホで記念写真などが撮れるようフォトスタンドを設置し、ＳＮＳなどで情報発信されることにより、多くの方に注目される場所になることを期待しています。

糸川のライトアップで「夜の賑わい創出」を狙っています。コロナ禍後、昼間のお客様はだいぶ回復したものの、夜の飲食店などは厳しい状況が続いています。このライトアップを契機に、糸川周辺の飲食店等への誘客の取り組みを、事業者や地域の皆さんと企画、実行してまいります。

広報あたみ2025．2月号掲載

市長メッセージ 191

熱海駅開業100周年

熱海市長　齊藤　栄

令和7年3月25日、熱海駅は開業100周年を迎えます。「熱海の発展は鉄道の発展と共にあり！」これは私が常々感じていることですが、鉄道と熱海の発展の歴史を振り返ってみればまさにその通りです。

まず熱海と小田原の間で、明治29年に人が客車を押す人車鉄道が、明治40年に蒸気機関で動く軽便鉄道が開通しました。そして100年前の大正14年に国鉄熱海線（国府津・熱海間）が開通し、熱海駅が現在の位置に誕生しました。昭和9年に丹那トンネルが開通し、東京からに加え関西方面からもお客様を迎えられるようになりました。さらに、東京オリンピック開催の昭和39年に東海道新幹線が熱海駅に停車。このように熱海は鉄道が発展するたびにより多くの来遊客を集め、全国有数の温泉観光地として発展してきました。

このような鉄道と熱海の発展の中で特に注目すべきは、昭和9年の丹那トンネルの開通です。それまでの東海道線のルートは箱根越えといわれるものでしたが、高低差が大きいために、大量の人とモノを速やかに運ぶことができませんでした。時の鉄道院総裁、後藤新平が大土木事業となる新路線の調査を命じ、数々の困難と16年に及ぶ難工事を経て丹那トンネルが完成。東海道線のルートが御殿場経由から熱海経由に替わることで、現在の日本列島の大動脈が誕生したのです。

熱海駅100周年の日には、こうした先人の偉業に感謝するとともに、熱海発展の歴史に思いを馳せようではありませんか。

広報あたみ2025．3月号掲載

市長メッセージ 192

令和7年度がスタートしました！

熱海市長　齊藤　栄

令和7年度がスタートしました。今年度は伊豆山被災地域の復旧・復興を加速するとともに、台風10号により被災した火葬場の早期の再開などに注力します。加えて、中長期的な視点で熱海市が持続的に発展する仕組みづくりを目指した「熱海２０３０ビジョン」の実現に力を入れてまいります。

「熱海２０３０ビジョン」の具体的な取り組みとしては、熱海観光をさらに活性化させるため、４月から１人１泊200円の宿泊税を導入するとともに、「熱海観光局」を始動させます。観光への投資には安定した財源の確保が必要不可欠であり、熱海観光局は、その財源を活用し官民協働による熱海観光の新たな司令塔として機能します。全国初となるこの仕組みにより、来遊客の満足度を高めるだけでなく、市民の皆様にも利益をもたらす観光施策を進めてまいります。

また、子育てに対する保護者の経済的負担を軽減するため、新年度から、市独自に０～２歳児の保育料の無償化を実施します。これにより、既に国により行われている３～５歳児の無償化と併せて、子どもの数や保護者の収入に関わらず、熱海のすべての子どもたちの保育料が原則無償化となります。加えて、０～２歳児を家庭で保育している世帯に「在宅育児応援金」を支給します。今後も引き続き、子育て支援策の充実を図っていきます。

令和７年は昭和100年、熱海駅開業100周年と節目の年です。本年を熱海市の飛躍の年とすべく、以上の施策に全力で取り組んでまいります。

広報あたみ2025．4月号掲載

市長メッセージ 193

紙ごみ類の分別回収

熱海市長　齊藤　栄

先日、「熱海市脱炭素ロードマップ」を公表しました。これは二酸化炭素の排出量実質ゼロを目指し、２０５０年までに熱海市が行うべきことを示した工程表です。

行うべきことは多岐に渡りますが、まず２０３０年までに可燃ごみを30％削減することを目標としました。なぜなら、熱海市の一人当たりのごみの排出量は全国平均の約２倍だからです。もちろん熱海市が観光地であることも大きな要因ではありますが、生活系ごみ（家庭ごみ）も全国平均の約1.5倍です。

さらに熱海市の可燃ごみの内訳を調べてみると、紙・布類が37.８％と最も高く、紙ごみ類をいかに減らすかが大きなポイントであることが分かりました。

このため、熱海市では紙ごみ類の分別回収と再資源化（リサイクル）を検討中です。例えば、現在週３回の可燃ごみの収集日を見直し、１回を紙ごみ類に特化した回収に充てたいと考えています。これにより、これまで焼却場で燃やされていた紙ごみ類は、紙製品などにリサイクルすることができます。

もしこれが実現し、可燃ごみを30％削減できると、年間約２億円ごみの処分費も軽減できます。また、各ご家庭のごみの量が４割減れば、45リットル30円のごみ袋が30リットル20円で済むようになります。

具体的な紙ごみ類の出し方、種別、回収方法など多くの検討事項がありますが、令和７年度はモデル地区での試行により問題点を洗い出し、令和８年度から市内全域で行うことを目標に進めていきたいと考えております。

広報あたみ2025．5月号掲載

市長メッセージ 194

橋田壽賀子先生 生誕100年

熱海市長　齊藤　栄

先日、橋田文化財団主催の「橋田壽賀子生誕100年記念 第33回橋田賞受賞式」が東京で開催され、出席してまいりました。

ご存じの通り、橋田先生は50年近く熱海で執筆活動を続け、「おしん」や「渡る世間は鬼ばかり」で知られる文化勲章を受章した著名な脚本家です。

橋田賞は先生が放送文化の振興・向上に寄与した番組・作品・人に贈るもので、先生が亡くなった後も行われており、今回が33回目です。当日の受賞者は著名な番組や、脚本家、俳優ばかりでしたが、皆さんが「橋田賞をもらうことほど名誉なことはない」と言っていたのが印象的でした。

先生は非常に気さくで率直にモノを言う方でした。また、15年近く前に、先生の仕事場兼ご自宅で「広報あたみ」の新春対談を行ったのですが、今、当時の記事を読み返すと、先生の先見性に驚きます。常に次の時代を見据えて脚本を書かれていたことが分かります。

先生は熱海市の名誉市民でもあるのですが、名誉市民称号の贈呈日を6日後に控えた令和3年4月4日にご逝去され、先生がご存命中の贈呈がかなわなかったことは残念でなりません。

橋田先生のような偉大な業績を残した方が熱海市で活躍され、名誉市民であることは熱海市民の誇りです。熱海港を望む親水公園に先生の顕彰碑があります。ぜひ、一度足を運んでいただいて、先生のご遺徳を偲んでいただけたらと思います。

広報あたみ2025．6月号掲載

市長メッセージ 195

市役所で働くということ

熱海市長　齊藤　栄

熱海市役所は今、職員採用に力を入れています。なぜかと言うと、一般的に労働市場が売手市場になっていることもありますが、今後、熱海市で新たな政策を進めるに当たって、多様で優秀な人材の確保が急務だからです。

昨年から、熱海市役所の受験を検討している大学生、短大生、高校生などを対象に職員採用説明会を行っています。その冒頭で、私が強調しているのは熱海市役所で働くことの魅力です。

まず、市役所の仕事は公(パブリック)の利益を追求することであり、市民に直接関係するものであること。たとえ困難なことはあっても手応えがあり、これほどやりがいのある仕事はないことを話しました。

次に、熱海市は全国有数の温泉観光地である一方で、少子高齢化や人口減少が急速に進んでいる課題先進地であること。このような社会状況の中で、経済の持続的発展と、市民の豊かな暮らしの双方を実現するための新しい仕組みづくりに挑戦することは、非常にエキサイティングであることを話しました。

職員採用については、新卒者だけではなく、即戦力となる社会人経験者も積極的に採用しようとしています。民間企業や公務員を10年以上経験した方をキャリア採用枠として募集し、年齢制限も45歳に引き上げています。一般事務職に加えて、幼稚園教諭・保育士、土木技術職も対象です。

人材確保は熱海市の持続的発展の土台です。一緒に熱海の未来をつくっていきませんか。

広報あたみ2025．7月号掲載

市長メッセージ 196

熱海自衛隊音楽祭

熱海市長　齊藤　栄

先日、「第1回熱海自衛隊音楽祭」が開催されました。この音楽祭は、四年前に発生した伊豆山土石流災害で犠牲になられた方々への追悼と伊豆山の復興を祈念したもので、当日は、熱海市や近隣の市町から聴衆約700人が集まりました。

音楽祭の冒頭、私は熱海市を代表して、自衛隊の献身的な救助活動への心からの感謝を申し上げました。令和三年七月三日の土石流発災から約一ヶ月間にわたり、陸上自衛隊板妻駐屯地などから延べ約九千人の自衛隊員が熱海入りし、救助・捜索活動に従事。猛暑の中での活動は20分行ったら40分休憩を取らなければ体力がもたないほど、非常に過酷なものでした。本当に頭が下がる思いです。

黙祷の後に演奏が始まりましたが、アッと言う間の充実した2時間でした。まず、駐屯地の自衛官による和太鼓や、らっぱの演奏からスタート。らっぱの演奏は自衛官の一日を分かりやすく紹介すると言う工夫を凝らしたものでした。その後、陸上自衛隊富士学校音楽隊がポップスやアニメを中心に楽曲を披露。最後は、聴衆も参加して全員での「上を向いて歩こう」の大合唱で締めくくりました。

自衛隊は日本の防衛という重要な仕事に加えて、災害派遣にも従事しています。昨今、風水害などの災害が頻発する中で、自治体にとって自衛隊の支援は必要不可欠となってきています。市民の皆様には、自衛隊の活動への感謝とご理解をお願いしたいと思います。

広報あたみ2025．8月号掲載

市長メッセージ 197

大阪・関西万博でのブース出展

熱海市長　齊藤　栄

7月下旬に、大阪・関西万博の会場に行ってきました。大阪万博と言えば、1970年(昭和45年)にも開催され、当時私は小学二年生。会場には行けなかったものの、三波春夫の『世界の国からこんにちは』のメロディーとともに、当時、日本中が万博にどれだけわくわくしたかが鮮やかによみがえります。

熱海市は焼津市と合同で万博首長連合主催の「LOCAL JAPAN展」にPRブースを出しました。両市から運んできた温泉で足湯を体験しながら、大型スクリーンで観光案内の映像を楽しんでもらう趣向です。真夏の温泉でしたが、広大な万博会場を歩き回る中での足湯の癒しは大好評でした。また、クイズイベントでは、「熱海に行かれたことはありますか」との私の質問に、年齢、性別、国籍などさまざまな観客の約3割の手が上がり、足湯を楽しんだ方々からも、「また熱海に行く予定」との声を多数いただきました。

万博会場は前評判とは異なり大盛況で、この猛暑のなか、外国人を含めて多くの来場者が列を作っていました。幸運にも、人気の高いイタリア館に入館できたのですが、その芸術性の高さはまさに圧巻。万国博覧会と言う場で各国のお国ぶりを体感する醍醐味を味わいました。

夜には大阪の繁華街である道頓堀周辺を歩いてみました。ものすごい人だかりで、万博の経済効果の大きさを感じました。万博終了まで残りわずかですが、機会があればぜひ訪れてみてください。

広報あたみ2025．9月号掲載

市長メッセージ 198

台湾トップセールス

熱海市長　齊藤　栄

8月下旬に、台湾からの誘客を目的としたトップセールスを行いました。熱海観光局や熱海の事業者とともに、台湾の政府機関をはじめとして、台湾最大手の旅行会社など7カ所を訪問。羽田空港からのアクセスの良さや箱根や伊豆半島への周遊性の高さ、そして熱海のまちの魅力をアピールしてきました。

熱海市はインバウンド(海外誘客)の第一候補を台湾としています。その理由は、まず台湾人は海外旅行が大好きで、日本へのリピート率も非常に高いこと。また、台湾の経済成長は目覚ましく、国民一人当たりのGDP(国内総生産)では既に日本を抜いており、さらなる訪日客を期待できることです。

今回、現地の旅行エージェントとの会話から、台湾では従業員のインセンティブ(ご褒美)旅行の需要が高いこと、一方で、受け入れに対していくつかの課題があることも分かりました。11月には熱海市が参加を予定している「台北国際旅行博」もあり、今後、相互の理解をさらに深めていくことで、的確な旅行商品を造成できる環境づくりと、受け入れ態勢の整備を進めていきたいと考えています。

コロナ禍以降、昼間の熱海駅前は大変賑わいがありますが、宿泊客数は横ばいの状況です。市内で新たな宿泊施設が建設されるなかで宿泊客数を伸ばすためには、インバウンドに力を入れる必要があると考えています。その対象国として、まずは台湾を始めとし、今後、他国にも広げてまいります。

広報あたみ2025．10月号掲載

市長メッセージ 199

まち歩きガイド養成講座

熱海市長　齊藤　栄

先日、「令和7年度 熱海まち歩きガイド養成講座」の閉講式で21名の方に修了証書をお渡ししました。この講座は今年で18年目となり、修了生は延べ331名となりました。

「まち歩きガイド養成講座」には特別な思い入れがあります。19年前の私が市長就任当時、熱海の観光は低迷。熱海は宿泊が目的の観光地で、まち歩きで熱海の魅力を体験するという発想はあまりありませんでした。自分は「歩いて楽しい観光地づくり」を掲げていましたが、「坂道だらけの熱海をどう歩くというのだ」との声もありました。新たな観光施策を模索していたさなか、出張先の長崎で「長崎さるく」（さるく：ぶらぶら歩くの意味）の市民ボランティアガイドによる観光案内に強く感銘を受けました。「これだ！これを同じ坂のまち熱海でもやってみよう」とスタートさせたのが、この養成講座です。

今年度の4カ月の養成講座期間では、熱海の文化・歴史、温泉、伊豆半島ジオパーク、ユニバーサルマナーなどを学ぶとともに、実際のまち歩きガイドも体験します。また、受講者のバックグラウンドは本当に多彩です。熱海で生まれ育った方に加え、熱海に移住され、この土地のことをもっとよく知りたいとの動機の方も多いです。

今は、スマートフォンで簡単に観光情報が手に入りますが、地元の方による観光案内はとても心に響きます。この養成講座の修了生が、熱海観光のさらなる活性化に力を貸していただけることを期待しています。

広報あたみ2025．11月号掲載

市長メッセージ 200

この一年を振り返って

熱海市長　齊藤　栄

この一年を振り返って、私にとって印象的な出来事がいくつかあります。

一つは大阪・関西万博です。熱海温泉や日本の温泉文化をＰＲすることを目的に２度にわたり万博会場を訪れました。今回の万博のテーマは「命輝く未来社会のデザイン」。日本企業のパビリオンで「ｉＰＳ細胞で作られた拍動する心臓」や、患者がどこにいても遠隔で手術ができる「空飛ぶ手術室」といった展示を見ました。ここまで進んでいるのかと大変驚くとともに、こういった世界最先端のテクノロジーが、日本が世界で生き残るための鍵であると改めて感じました。

もう一つは初めてハワイに行ったことです。プライベートの旅行だったのですが、一流のリゾートとはこういうものかと実感しました。ビーチの美しさや自然景観の素晴らしさについては熱海も負けていないと思いますが、観光施設の整備水準やホテル・飲食店のサービスレベルの高さに驚きました。また、滞在中の一日を使い、ハワイ観光の司令塔である「ハワイ州観光局」の代表者と直接話をしました。10・25％の宿泊税などを原資に、ハワイ州観光局が観光施策の立案、実施、さらにはその効果の測定というサイクルを的確に回すことで、ハワイが世界に冠たるリゾート地としての地位を維持し続けていることを確信しました。我々熱海も、今年からスタートした宿泊税と「熱海観光局」を使って、世界一流のリゾート地を目指してまいります。

市民の皆様におかれては、どうぞ良いお年をお迎えください。

広報あたみ2025．12月号掲載